

公立大学法人山口県立大学 附属 郷土文学資料センターだより

郷土文学資料センター設立25周年を迎えて

稲田 秀雄（郷土文学資料センター所長）

昭和61年（1986）に設立された山口県立大学附属郷土文学資料センターは、今年、25周年の節目を迎えることになりました。この間、とりわけ平成18年（2006）の法人化以降、当センターは、地域貢献組織として「地域文化の振興」に資する取り組みを地道に続けて参りました。

中でも、広報強化の一環であるホームページ作成の成果として特筆すべきは、「所蔵資料について」にアップされた「郷土文学雑誌細目」と「渡辺砂吐流文庫目録（単行本篇）」です。前者は、当センター所蔵雑誌各号の執筆者と作品題目を一覧することができます。後者は、平成13年（2001）

に寄贈いただいた、山口市阿東出身の俳人・渡辺砂吐流関係資料のうち、単行本の目録を一覧表にしたものです。いずれも当センター研究員と国際文化学部文化創造学科の学生との協力により完成しました。

また、山口県立山口図書館に設けられた「ふるさと山口文学ギャラリー」の展示に際しての資料貸し出しなど、法人化以降の予算措置による「積極的収集」の成果も出ています。今年度は、萩出身の作家・編集者である榎崎勤関係資料の展示を学外で予定しています。現在までの寄贈資料とともに、この6年間に計画的に購入した資料（自筆原稿・書簡を含む）は、嘉村磯多の他、中本たか子・榎崎勤などのいまだ全集の編まれていない県内出身の作家たちを中心としながら、今やかなりの充実を見せております。

当センターは、所長を含めて現在4名の研究員で成り立つ、たいへん小さな組織です。しかしながら、所蔵資料の管理だけでなく、研究成果の地域への還元（公開講座）、学部教育へのプログラム提供（「地域実習」等）、県内機関との連携など、多岐にわたる取り組みをこれまで行っており、これからも続けていくつもりです。文学というものは決して声高な媒体ではありませんが、他に類のない当センターのような組織が本学の特色となり得るのであれば、広報のさらなる強化や資料の利活用も含めて、今後とも着実な活動を持続すべく、学内外各位のご理解とご支援を切にお願い申し上げる次第です。



▲ 開所式（昭和61年5月15日 中山清次学長（左）、上野さち子所長）



「郷土文学資料センター設立」前史

—「センターだより 第5号」からの再録—

熊本守雄 (当資料センター前所長・本学名誉教授・尾道市立大学名誉教授)

私が昭和41年4月に、山口県立大学の前身である山口女子短期大学に赴任するとすぐに、県下に伝存している文献のうち、写本・版本の所在調査を始めました。夏休みを利用して、学生諸君にも、出身地において調査をしてもらいました。

当時は、県下の図書館における写本の管理・保存状態は、決して良くはありませんでした。司書の資格を持った人が一人もない図書館も少なくありませんでした。又、図書館の職員には、退職前の職員をあてて、退職前に少し楽をさせてあげようといった雰囲気のある所もありました。職員の数も少なく、新規購入の図書の手続きに追われて、それで手一杯という状態で、明治の頃から地元の篤志家より寄贈された多くの図書が、変体仮名が読めないということもあって、全くの手つかずの未整理の状態であり、寄贈された図書の台帳も作られていない所もありました。紙魚によって汚損された図書が処分されたり、誰も知らないところで、古い本がこの世から姿を消すということも有り得るような状況でした。蔵書目録も整備されていませんから、当然、世間には、所在も知られず、誰も利用できない、宝の持ち腐れのようなところもありました。



▲ 嘉村礪多関係資料展示 (昭和61年5月15日)

そこで、地道な調査を積み重ねて、それを文献目録として、昭和55年から57年にかけて、『山口県に伝存する国語学・国文学・国語教育関係文献(写本・版本)目録』四冊にまとめることができました。

この文献目録を作った頃、全国各地で文学館設置の動きが盛んになっておりました。かつての山口県は、文化事業の面では、先進性をもった県でした。大正から昭和の初めにかけては、図書館活動において、信濃教育会の長野県をおさえて、全国一でした。まだ世も落ち着いていなかった戦後間もない頃ですが、田中龍夫知事の時代に『山口県文化史』が全国に先駆けて出版されました。学界では今でも高く評価され、語り草になっています。

又、小沢太郎知事の時代には、公立文書館としては、全国で初めての『山口県文書館』が設置されました。ただ、文学館の設立については、山口県は後れをとっておりました。そこで山口女子大学としては、山口県文学館の設置趣意書をもって、当時の中山清次学長が、県の田中武夫総務部長さんに話を持っていかれました。一方、詩人の和田健先生や新南陽市選出の県会議員などを勤められた徳原啓氏などは、当時、県の教育長でいらっしゃった高山治前学長に山口県近代文学館の開設を陳情してられました。そこで、山口県教育委員会社会教育課、県立図書館、県立文書館、総務部学事文書課、文化課、山口女子大学の関係者が集い、協議・調整の結果、山口女子大学に昭和61年4月から附属郷土文学資料センターが設立されることになりました。そういう経緯もあって、附属郷土文学資料センターは、単に大学の附属機関という性格にとどまらず、全県下の期待を担って設置された組織であり、そうした背景と歴史を背負ったものといえます。それ以後、多くの方々のご理解とご協力をいただいて、今や一万点を越える資料を寄贈いただいております。

(「山口県立大学附属郷土文学資料センターだより」第5号〈2005年5月14日発行〉より抄出)



新たな段階を迎える

清 永 唯 夫（山口県創作懇話会会長）

「郷土文学資料センター」が、設立以来早くも25周年を迎えたと知り、設立当初から委員の一人として運営にかかわって来ただけに感慨深く、同時にまた、郷土関係者の図書刊行に際して市図書館・県図書館と併せて「郷土文学資料センター」への寄贈を促し続けたこと以外、如何程のお役にたち得たかと、反省もまた切なるものがあります。

しかも、山口県立大学の開学70周年記念式典に際して感謝状を賜るなど、いささか恐縮いたしているところです。

私の場合、直木賞作家古川薫・船戸与一、泉鏡花賞作家赤江瀑、あるいは芥川賞候補作家の井上孝・長川修・田中慎弥ら諸氏を身近に感じ、また、林芙美子・金子みすゞ・種田山頭火という人々の業績に接しながら下関の地に生活する日々、山口県が歴史のみならず、文学的にも豊かな実績を持ちながら、文学面での顕彰に積極的な姿勢を見せぬことへの不満が高まる中で、国文学教育に優れた実績を築いてこられた山口県立大学を母体とした当センターが設立されたことは大変喜ばしいことでした。

戦後、わが国の文化施設建設の大まかな流れをみますと、全国的に図書館充実時代、音楽・演劇等ホール時代、美術館時代に続いて文学館時代というものを迎えたように感じていたのですが、山口県の場合、なかなか文学館建設への動きが具体化することなく、そうした時流の一端を示すものとして当センターが山口県立大学内に誕生したわけで、少なからぬ期待も寄せたものです。

そして今日の山口県下を見ますと、山口市の中原中也記念館、長門市の金子みすゞ記念館が登場（下関市と合併した角島には中本たか子記念館もあります。）して大きい成果を示し、県立図書館が取り組み始められた県下文学の顕彰事業、さらに下関でも先人顕彰館（田中絹代記念館と併設）において下関に関する文学資料の収集展示が開始されました。

またこれらに併せて、田上菊舎、種田山頭火、井上剣花坊、兼崎地橙孫、まど・みちお等の短詩・詩系統の先人たち、また作家の宇野千代、嘉村礒多等の顕彰が積極的に展開されるようになり、こうした状況下、当センターの役割もまた新たな段階を迎えたと言うべきでしょう。

勿論、大学の附属機関としての当センターは学術面での向上は言うまでもなく、各地における記念館や顕彰事業の更なる隆盛と質的向上のために、単なる情報の交換を越えて、各館、各顕彰会の連絡調整、研究指導などの積極的な姿勢を持つことも、今後の大きい使命となるのではないのでしょうか。

当センターの在り方について再検討しようという姿勢が今日見られることは心強く、今後一層の充実を願うところです。



▲ 設立25周年記念懇談会（平成23年11月10日 本学にて）



河上徹太郎と図書館

稲 生 慧 (元岩国市立図書館長)

幼い頃から母堂である河上ワカさんに可愛がられ、西岩国の一角にある白壁のこの屋敷を時々訪問していたが、あの高名な徹太郎氏の家とは知る由もなかった。

岩国図書館に就職が決まり、はじめて、あの屋敷は河上徹太郎氏の家であることを知り、驚くとともに、そうかあの方がそうだったのか、と誇らしくさえ思ったものであった。おとなしく、目立たない人だったが、何しろ「日本のアウトサイダー」で新潮文学賞を受賞された直後の出会だったので感動も一入であった。

聞けば、ちよくちよく帰郷し、図書館に顔を出していたというから、故郷の図書館をこよなく愛してくれていたのだと勝手に考えていた。「今、帰ったよ」と、図書館の裏口に顔を出し、そそくさと館長室に直行する無口な人であった。

なぜ、両親のいない故郷に、頻繁に帰ってきていたのか。悪友がいつも待っていたこともあったろう。宇野千代が晩年、度々帰郷していたのを文学仲間が「故郷に向う六部の気の弱り」と揶揄したそうだが、そんなこともあったのかもしれない。「傷ついた心を癒すためだよ」という人もいた。

想像するに、「政治ははきらいだ」といいながら戦時体制に順応したが、敗戦とともに「配給された自由」を書き「すべての面で手足をもがれたわが国の唯一のホープは文化である。」「文化の自由とはとらわれざる批評精神を持つこと」と論じたところを見るとそのあたりに希望を見出していたのかも知れない。このことについて論評を加える暇がないが、少なくとも「文化の復権」について頭にあったのだと思う。

当時、岩国図書館の館長は文化人で鳴らした人であった。次々に新しい図書館サービスを打ち出していたが、徹太郎氏は「これからの図書館の役割は大きくなるよ」と館長に語ったという。当時の図書館の広報誌「岩国ライブラリー」に次のような記述がある。「図書館は社会教育センターであり、カルチャーセンターである。」

それを実証するかのように、全国でも珍しい「市民大学講座」を開設している。大変人気のあった講座で250名は受講していた。すべりだしは、広島大学の教授や中国新聞の論説委員に講師を依頼していたが、講座のジャンルを広げて文学、文化、歴史、国際問題、経済、社会問題など、地域的にも広く講師を求めた。

昭和26年、徹太郎氏は50歳、「文芸評論」を担当しているが、当時の講師陣を挙げると樺俊夫、阿部知二、谷川徹三、黒田清輝、桑原武夫のほか、井伏鱒二、三好達治の名前も見える。昭和28年には、飯塚浩二、山代巴、真下真一、徹太郎氏は「イギリス人の現代生活」を。昭和31年には、坂西志保、池田数好、阿部静枝、と多彩である。徹太郎氏の推薦、口利きがあったことは言うまでもない。

講座の内容は速記録（岩国文学ライブラリー）にして刊行。速記録は若輩の私が担当（一部）し大いなる知的刺激を受けた。図書館の存在意義を理解する大きな協力者であったことを思い起こしている。



県詩人懇話会余話

和田 健 (詩人・当センター運営協議会委員)

毎年発行される『現代山口県詩選』について、一こと書いてみたい。今の詩選は県が主宰する『芸術祭』の一かんとして発足。創刊は昭和39年12月1日。

創刊号の序文を県の藤本菊二教育長が書いている。防府が生んだ自由律の俳人、種田山頭火を敬愛しておられたのか、いつかお宅を訪れたとき、床の間にかけてられた軸を見せてもらった。有名な句だったが、私は忘れた。

県詩壇にも期待を寄せておられ、詩選創刊号に寄せられた序文から一部抜き書きしてみよう。

「詩について語るほどのことはいたしかねるにしても、詩をよみ、詩をたのしみたい心持ちは何としても持ちつづけたいものであります」。続いて「友愛、奉仕、躍進」で受けとめ……いつの間にか、文章が当時の山口国体に飛躍し、花いっぱい運動に及ぶ。

ここで話を元にもどすと、山口県詩壇と呼んでいい時代ができたのはいつだろうか、これは私にも分からない。

山口市出身で、上京して活躍した吉田常夏^{とこなつ}が帰郷し、昭和の初め下関から発行した総合文芸誌『燭台』であろうか。今や全国に名を知られた童謡詩人・金子みすゞも一時投稿していた。

次いで昭和13年7月、福富武人^{たけと}・長谷執持^{しゅうじ}の二人が編集発行した詩華集『山口縣詩選』。これには児玉花外以下39人が選ばれている。

いよいよ本論に入ろう。『山口県詩選』は「現代」を頭につけていて、今年で48冊を発行する。

ここで気がついたが、昭和26年7月に復員して間もない光の礒永秀雄が『現代山口県詩選』と題し県詩選をいち早く発刊していることである。その先見の明には脱帽以外にない。巻末で「山口県詩人風土記」と題し、一筆ふるっているが、なかなか愉快的な文章である。

和田(私)を評している部分を抜いてみよう。

「山都の雲の落着き(意味不明)に『四季』の流れは大御所和田健。防長詩壇、放送詩、『文芸風土』の主選者として活躍。現在『こだま』顧問格同人。『生活の貌』^{かお}以来いちずな庶民詩の歩みは『風媒花』の著書へ発展。平易で深い隙のない佳品を生む。」

現在の『山口県詩選』は、礒永が発行したものと関係なく、県をバックに、広く一般に呼びかけ、特に各詩社を中心に作品が集められている。が、必ずしも多くはない。

私も年をとり後任に悩んだが、幸いスヤマ氏が引き受けてくれ、今日に至っている。

事務局は、私が山口市教育委員会にいたので詩選の発行はそこにおいたが、退職した後にわが家で作業し、家内にも会計から発送までも手伝ってもらった。



▲ 『詩園』同人一同(昭和15年頃)。上段左から2人目が和田健氏。

寄贈図書（2011年5月～2011年11月）

江後迪子『萩藩毛利家の食と暮し』（つくばね叢書、2005）・江後迪子『信長のおもてなし 中世の食べもの百科』（吉川弘文館、2007）・江後迪子『長崎奉行のお献立』（吉川弘文館、2011）・翠鳥・明風『FAX歌仙集 氷室』（ぎょうせい、2006）・多田美代子『文学を歩こう 嘉村礒多のふるさと』（嘉村礒多顕彰会、2011）・福田礼輔 監修『「やまぐち歴史・文化・自然検定」公式テキスト やまぐち本』（山口商工会議所 やまぐち歴史・文化・自然検定実行委員会、2008）・二義少年奉賛会『二義少年三百年祭 清介・角左衛門を偲ぶ』（二義少年奉賛会、2011）・防府史談会『防府霊場八十八ヵ所めぐり』（防府史談会、2011）・岩田文昭・大澤広嗣「近角常観と嘉村礒多―新出資料の紹介を中心に」『大阪教育大学紀要』（大阪教育大学、2011）・中田潤一郎『連禱―がんと末期医療を考える会の記録―』（喜怒哀楽書房、2011）・中田潤一郎『中田潤一郎遺稿集 ニワトリ柵を越えにけり』（喜怒哀楽書房、2011）

寄贈雑誌（2011年5月～2011年11月）

『あらつち』第62巻5号～9号（670～674）（あらつち社事務局）・『颯』87号（颯事務局）・『其桃』第798～802号（其桃発行所）・『風響樹』VOL.40（風響樹同人）・『地橙孫新聞』第006号（兼崎地橙孫顕彰会）・『文芸山口』第297～299号（山口県文芸懇話会）・『山彦』VOL.104～106（山彦俳句会）・『ふるさと紀行』平成23年夏の号（第126号）、秋の号（第127号）（ふるさと紀行編集部）・『文芸山口』第295号（山口県文芸懇話会）・『ほうふ図書館だより』NO.270（防府市立防府図書館）・『大内文化探訪会』第29号（大内文化探訪会）・『月刊まるごと周南』2011年9月号（シティーケーブル周南）・『合同年刊句集 すばる』VOL.46（すばる俳句会）・『シュリンプ』第8, 10, 11号（しゅりんぷ詩舎）・『火山群』通巻 第50巻（岩国文学協会）

編集後記

▼センターだより18号をお届けします。▼今号は、センター開設25周年記念号として増頁しました。巻頭に所長のあいさつを掲載しております。▼本センターの前所長であり、現在も運営協議委員としてご助言いただいている熊本守雄氏による、開所当時の県下の郷土文学をめぐる状況についての一文を再録させていただきました。今後の本センターのあり方を考える上で、いまいちど初期の志を確認することができるように思われます。▼長年にわたり、本センター運営協議委員としてご尽力いただいていた清永唯夫、稲生慧両氏に、郷土文学にまつわる思い出やご提言を御寄稿いただきました。年1回の協議会では、いつも郷土文学への愛あふれるご発言を賜りましたが、それがそのまま伝わってくる文章です。心より感謝いたします。▼和田健先生には山口県詩人懇話会の発足当初の思い出を御寄稿いただきました。今後も『センターだより』を通して、こうした貴重な記録を残していきたいと思えます。▼さる11月10日に、開設25周年の記念行事として、懇談会を催しました（3頁写真参照）。県下の顕彰会の関係者を含め多数ご出席くださり、われわれも本センターの活動の今後の指針を多くいただくことができました。この催しについては次号にて詳しくご報告いたします。▼次号は通常通り、5月刊行予定です。（K）



■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター（〒753-8502 山口市桜島3-2-1）
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2011（平成23）年11月30日